ジャン・ピアジェのヴィゴツキー理解について、あるいは、コメンテールのコメンテール

神　谷　栄　司

ある著述家が他の著述家の書物を ── 公刊後25年たって ── 眼にしたところ、その著者はその間に世を去っていた。ところが、その書物は、ごく間近に、個人的な接触のなかで語り合わねばならないような、実に興味深い観点を含んでいるのだ。── こうしたことは悲嘆なしには受けとめられない。友人のA・ルリアは、私に対するヴィゴツキーの共感的であると同時に批判的な立場の傾向をよく把握させてくれたが、私はそれを読むことも出会うこともまったくなかった。そして今日、それを読みながら、私は心の底からの悼みを感じる。私たちは多くの点で理解しあうことができたのだから。(1962 / 1997, p.501)

このように書き始められたピアジェのコメンテール ── 「『子どもにおける言語と思考』と『子どもにおける判断と推理』に関するヴィゴツキーの批判的考察に対する論評」(1962 / 1997) ── は、その死後においても現代の心理学に多大な影響を与えつづけている巨人の一人が、同じく自分と類似する ── もちろん、その理論的立場は同じではないが ── 巨人であるヴィゴツキーをどのように捉えたのか、を直接に知ることのできる、おそらく唯一の資料である。にもかかわらず、そのコメンテールは、筆者が知る限り、いまだ十分に考察されてはいない[1)]。他方、ヴィゴツキーがピアジェ(ただし初期のピアジェ)をいかに理解したのかは、彼の最後のモノグラフ『思考と言語』(1934 / 1982 // 2001)によって明らかであろう。こうして、何事によらず一方通行はよくないのに、私たちはそのような状況にとどまり、ピアジェとヴィゴツキーの違いだけを指摘しているのである。

上記のようにピアジェが望んだが実現しようもなかった「対話」を架空の対話として「実現」するための準備資料をヴィゴツキアンの側から提供すること

が、小論の意図である。そのことが今は亡きピアジェの「悲嘆」と「悼み」を多少なりとも和らげるものとなるであろうとの願いが、小論にはこめられている。

ピアジェが参照しえた資料の限界

コメンテールの執筆のいきさつは、ピアジェ自身が語っていることと、このコメンテールに付された編者の脚注[2)]とによって明かにすることができる。ヴィゴツキーの主著の一つである『思考と言語』の初の英語版(1962, MIT Press)は完全な翻訳とは言えない抄訳であったが[3)]、その訳者の一人であるE・ハンフマン女史から「私〔ピアジェ〕の初期の諸著作へのこの偉大な著述家〔ヴィゴツキー〕の考察にコメントすること」(1962 / 1997, p.502)を求められたことが直接の契機であった。そのときに論評のためにピアジェに渡されたヴィゴツキーの論考は『思考と言語』の第2章の原稿 manuscrit と第6章の要約 extraits であった[4)]。同書第2章のタイトルは「J・ピアジェの学説における子どもの言語と思考の問題」であり、その内容はピアジェが直接に対象とされていることから、第2章の manuscrit とは第2章全体の翻訳であったと推察できるであろう。また、第6章のタイトルは「児童期における科学的概念の発達の研究」であり、ピアジェのたどった研究とも関連はするがピアジェそのものが論じられているわけではないので、第6章の extraits とは、初版英語版の全体が『思考と言語』の完全な翻訳ではなくその要約であることから、初版英語版第6章の印刷原稿であったと考えられる[5)]。

しかし、そのような推測の真偽は別にして、いずれにしても、ピアジェがコメンテール執筆にあたり参照することのできたヴィゴツキーの著作は『思考と言語』の一部分にすぎない。およそ編集者は編集意図を明確にすることを慣習とし、また、それが彼の命そのものであるから、ピアジェに渡した資料の限定も理解できないわけではないが、第2章と第6章の論評を依頼しつつも、『思考と言語』の初版英語版全体の印刷原稿を渡していたとすれば、ピアジェはヴィゴツキーをどのように論じたであろうか。その方が、より学問的価値の高いものが残されたことは確実であろう。

このコメンテールのコメンテールが捧げられる架空の対話には、世を去った1934年時点でヴィゴツキーが持っていたものがあらゆる形で動員されるであろうから、小論はピアジェのコメンテールを考察するときに、彼が参照しえなかった点をも含む『思考と言語』と、この著作に収まりきれないヴィゴツキーの他の著作やアイディアとを、使用することにしたい。[6)]

コメンテールの主題

ところで、ピアジェは、ハンフマン女史から執筆の依頼を受けたとき、即座に感謝の意を示しつつも、「ある種のためらい」を感じていた。それは、自分が1923年と24年に出版した書物に対する、34年に上梓された著作におけるヴィゴツキーによる評価を論じるということに、つまり、約40年前の自分のアイディアに関する約30年前のヴィゴツキーの批評を取り上げるということに起因している。取り上げ方によってはたんなる回顧的なコメンテールになりかねないという懸念であった。しばらく考えているうちに、ピアジェは少なくとも自分にとって意義のある取り上げ方を思いついた。「それ以降に自分の行ってきたことが、ヴィゴツキーの批判的考察を確証する、あるいは、覆すことへと、導くのかどうか」(1962 / 1997, p.502)という取り上げ方がそれである。すでに物言わぬ人物に対して、一面では自分の土俵に引きずりこみすぎる危うさをともないながらも(たとえばピアジェは「ヴィゴツキーの解決する中心的問題は、結局のところ、人間という存在の全体の場合と同様に、子どもの活動の適応的・機能的な本性に関する問題である」(同上)と考えているが、それなどは「危うさ」をともなう規定であろう)、ピアジェの率直で公平な態度は、全体としてみれば、その危うさを回避しえている。彼は自分の考察の全体的な結果を、次のように捉えている。

> …その後の私の結果は、両者〔確証と覆し〕を可能にしている。すなわち、私は、1934年当時はそうでなかったが、ある点ではヴィゴツキーとより多く一致している。だが同時に、他面では、他の点について応答するために、当時は持っていなかったより良い論拠を所持している。(1962 / 1997, p.502)

ピアジェのコメンテールは、内容的には、二つの問題を取り上げている。ひとつは自己中心性をめぐる問題であり(「認知的自己中心性」と「自己中心的言語」)、

もうひとつは概念と一般化に関する問題(「自然発生的概念、学識の獲得、科学的概念」と「操作と一般化」)であった。以下、ヴィゴツキーと一致する点と一致しない点をピアジェがどのように捉えたか、について、考察することにしよう。

認知的自己中心性と自己中心的言語

ピアジェは、この問題でのヴィゴツキーとの関係について総括的に次のように述べている。

> ヴィゴツキーは、私がうまく理解しているとすれば、子どもの知的自己中心性の観念については私と一致していないが、彼は、私が自己中心的言語と呼ぶものの存在を認め、そこに、後続する ── しかも、論理性と相まって、自閉性の終焉に役立つ ── 内的言語の出発点を見ている。(1962 / 1997, p.502)

まず、自己中心性をめぐる問題について、より詳しく考察していこう。

1．ピアジェは「子どもの活動の適応的・機能的な本性に関する問題」での基本線はヴィゴツキーと一致するとした上で、その後に行われた研究をもとに「感覚―運動的次元における知能の誕生」や「論理的―数学的操作の発生」に関して自分の書いたものから言えることは、「ますます生物学的な意味で、適応の文脈に思考の登場を位置づけること」は容易であることだ、と述べる(1962 / 1997, p.502)。その見地から、彼は、ヴィゴツキーを「生物的－社会的オプティミズム」と特徴づけている。オプティミズムかどうかはさておき、自らを生物学的立場としヴィゴツキーを生物的－社会的立場と位置づけるピアジェは、間違っているとは言えまい。ヴィゴツキーは、ケーラーの研究に依拠しつつ、子どもの(したがって大人も)知能の起源はチンパンジーの実践的知能(視覚的場の全体的な知覚、迂回的操作など)と同様であること(『思考と言語』第１章)や、子どもの発達を自然的発達と文化的発達の融合である(神谷, 2010, 第Ⅱ章)と捉えているのであるから。その意味では、ヴィゴツキー理論を文化―歴史理論とのみ捉える見方からすると、ピアジェとの接点が失われ、ピアジェから摂取するものは何もなくなり、批判の対象としてのピアジェだけが残ることになるが、筆者はそうは言えまいと考えている。

２．オプティミズムとかかわってくる点であるが、ピアジェは、子どもの発達において必然的に現れる「体系的なエラー」(1962 / 1997, p.503)をヴィゴツキーは見ていない、と考えている。ピアジェによれば、適応に成功するには二つの条件が不可欠であり、その一つは「均衡のシステム」である。論理操作を例にとれば、「最初の均衡のシステム」は７、８歳にならなければ成立しない。もう一つは、適応とは「活動に固有な構造に対する客体の同化」と「客体に対する構造の調整」との「均衡」のことであるが、その「均衡」は全体的に適応的形態をとるとは限らず、また、適応の努力は「体系的なエラー」に導くこともある。こうして、論理操作の発達(これがピアジェの発達理論の主軸である)は、最初の同化と調節との均衡が生じる７、８歳以前のエラーと、それ以降もうまく適応的形態を取らずにエラーに陥るというように、エラーを必然とすることになる(同上)。

そのエラーは、「行為のヒエラルヒーのすべての次元」において現れる。知覚の分野においては「幻想」の形で生じている。また、思考の領域においても、「天動説からコペルニクス的転換へ、アリストテレス物理学の誤れる絶対化からガリレオの慣性原理の相対性、アインシュタインの相対性へ等々」の科学史が、「脱中心的」システムに直接に対立する観点の幻想に由来する「体系的なエラー」から解放されるのは幾世紀も必要であったことを示したように、そのエラーは子どもの知的発達において不可避なものである(1962 / 1997, p.503-4)。それは、「兄弟」の観念(これはヴィゴツキーも言及している)、道の「遠さ」と「長さ」の観念によって、説明されている。結局のところ、体系的なエラーの根源にあるものは、認知的(あるいは知的)自己中心性であり、同じことだが、脱中心化の欠如だということになる。

３．思考の発達に限ってみたとき、ピアジェがヴィゴツキーの『思考と言語』第５章を参照しえなかったことは、まことに残念である。そこでは、12歳頃から始まる概念形成に達する以前の子どもの思考の道具(より正確には概念ではないが概念の等価物)としての「形象 образ」と「複合 комплекс」が、ヴィゴツキーらが行った実験をもとに豊かに語られている。その叙述の中心は「複合的思考」の実験的解明であった。ピアジェのいう思考のエラーは脱中心化より前の思考に関するものなのであるから、ヴィゴツキーの場合は、概念形成以前

の、しかし、概念形成を内的に準備するような複合が対応しているであろう。ピアジェが第５章を参照していれば、ヴィゴツキーのオプティミズムという規定は出てこなかったと思われるのである。

ところで、ピアジェは知覚と思考におけるエラーについて述べつつも、感情については異なるアプローチをしている。「私たちの基本的な個人間の感情はたえずうまく適応していることや、たとえば嫉妬・羨望・虚栄などのそれでもやはり普遍的な反応も個人の感情的パースペクティヴにおける『体系的なエラー』の多様な形態を示していないことを考えると、感情生活の面に関しては、ある程度のオプティミズムが必要であろう」(1962 / 1997, p.503)。文の内容は文脈的にも判りにくさを伴っているが、感情の領域の問題はピアジェの「体系的なエラー」(したがって、認知的自己中心性－脱中心化の図式)では解明できないことの告白ではないかと考えられる。

４．その後に、自己中心性という術語にかかわって個人主義との誤解を招いたことや、初期ピアジェがその師であるブロイラーの「自閉性」の概念を用いたことをめぐる問題、フロイトの「快感原則」の無批判的受容の批判への反論が続いているが、やや回顧的となるので(つまり、中期、後期のピアジェとは深く関わらないので)、ここでは省略することにする。ただし、小論の論点と関係してくる二つの点だけ指摘しておこう。

ひとつは、思考の領域にかかわる点だが、知的自己中心性によってピアジェが表そうしている発達過程が次のように規定されていることである。――「知的自己中心性の術語(疑いもなく悪い選択であった)によって私が表現しようとした中心的なアイディアは、…より豊かな認識はより貧しい認識をたんに完成させたものであるというように、認識の進歩は単純な加算あるいは加算的成層によって進行するものではなく、この進歩はやはり加算的であるとともに遡及的な過程による以前の観点の絶えざる再編と修正に立脚していることである」(1962 / 1997, p.504)。つまり、認識の進歩は質的な変化を伴うのであり、根本的には、「脱中心化の法則」に従う、というのである。

もうひとつは、自己中心性の術語を使用した意図は「脱中心化の原初的欠如」を表そうとした点にあるとしたうえで、ピアジェは自己中心性の意味を「私の意識の肥大化 un hypertrophie de la conscience du moi」(同上)と規定し

ていることである。

この二つの点は、小論の結論づけのところで、振り返りたいと思う。

自己中心的言語については、ピアジェはヴィゴツキーの考察にかなりの程度、同意している。ある意味では、ピアジェとヴィゴツキーがもっとも接近している箇所である。

1．まず、自己中心的言語に関するピアジェの最も一般的なテーゼをコメンテールのなかから示しておこう。

> 特権的で無意識的な中心化として特徴づけられる ── つまり、たえず私たちがより簡単に述べてきたように、「諸観点の無差別化」として特徴づけられる ── 認知的自己中心性は個人間の諸関係に、とりわけ言語によって翻訳されるそれに、同じようにはあてはまらない、などということには、根拠がない。(1962 / 1997, p.506)

ここでは、小論における後の考察のために、《自己中心的言語は認知的自己中心性の言語への翻訳である》、という点に留意しておきたい。

2．その上で、ピアジェは、認知的な中心化と脱中心化の観点から思考と言語の関係を研究しようとして、自己中心的言語が「厳密な意味での協同的言語」と対立的であることを明らかにしている。そのためにピアジェは『子どもにおける言語と思考』第2章において、「子どもたちが自分自身の観点を越えていくために感じる困難性に光をあてるために、談話と特に彼らのあいだの討論を研究した」(1962 / 1997, p.507)のであった。[7] こうして、ピアジェは「モノローグ〔独り言〕と『集団的モノローグ』との一部を適応的コミュニケーションに対立するものとして分離させ」(同上)、それらを言語的自己中心性の一種の尺度にしようとした。

ところが、このことをめぐって賛否両論が渦巻いたようである。反対論の底流には自己中心的言語に対する無理解があり、自己について語ることまで自己中心的言語とされることもあった。つまり、自己中心的言語とは何を指すのか、その減少をどう見るのか、あるいは、統計上減少と言えるのか、などについて議論が交わされた。

3．そうしたなかにおいて、ピアジェはヴィゴツキーのこの問題での見解を検討している。まずピアジェは自分の同意できることとして次の三つの点をあ

げている。

まず、ヴィゴツキーはそこに〔自己中心的言語の減少に〕真の問題があるのであって、統計上の問題だけにあるのではない、と理解した。第２に、彼は尺度の取り方によって諸事実を消滅させるのではなく、諸事実を再発見した。すなわち、活動に困難性がある場合に小さな子どもたちのあいだで自己中心的言語が頻出することや、言語のこの形態は減少しているのに、この減少は内的言語になるということへの観察は、きわめて興味深い。第３に、彼は、自己中心的言語はより発達した主体の内的言語の出発点をなすという新しい仮説を提起したが、その際に、内的言語は論理性と相まって、自閉性の終焉に役立ちうるものであることが詳しく説明されている。そして、この仮説について私は彼と完全に一致していると思われる(1962 / 1997, p.508)。

ただし、ピアジェは、「私が思うには、ヴィゴツキーがやはり見なかったものは、諸観点の調整や協同への妨げとしての自己中心性である」(同上)と述べ、またヴィゴツキーの方は、「問題の機能的アスペクトの区別を主張しなかったという理由で」(同上)私〔ピアジェ〕を非難している、と不一致点も明確にしている。

ピアジェは、前者にかかわる点であるが、『子どもにおける道徳判断』(1932年)でのルール遊びの研究をとりあげ、「７歳より前の小さな子どもたちは仲間のあいだで遊びのルールを調整することを知らず、各々が自分のために遊んでいるが、同時に、これは『試合』だということを理解せずにすべてを得ている」(1962 / 1997, p.509)と述べる。ピアジェがここで言いたいのは、子どものルール(遊びおよび生活の)への関係の発達が「道徳実在論」的意識のもとでの一方向的敬意と他律性とから協同性にもとづく自律性へという発達としてあらわれ、これが知的自己中心性から知的協同性への認知発達とパラレルに捉えられるということであろう。

４．こうして、ピアジェはより全体的に、自己中心的言語をめぐるヴィゴツキーとの異同について述べる ── 「言語の最初の機能は包括的なコミュニケーションの機能であり、次いで、この言語は自己中心的言語と『コミュニケーション』言語とに分化する、とヴィゴツキーが述べるとき、私は彼と一致すると

確信している」(1962 / 1997, p.509)。ただし、ピアジェは次の点では見解の相違があると言う。「しかし、続いて、言語のこの二つの形態はともに社会化されており、もっぱら、それらの機能によって区別されるのだ、とヴィゴツキーが主張するとき、私は彼に従うことはできない」とピアジェは述べて、その理由をあげている。「なぜなら、社会化の語は次のようにあいまいだからである。すなわち、もしAという個人がBという個人も ── まったくそうではないのに ── 自分と同じように考えていると信じるとしても、また、彼が両者の観点の相違を理解するにいたらなかったとしても、それは明らかに、彼らのあいだに接触があるという意味で、社会的行為である。しかし、私はそれを、知的協同性 la coopération intellectuelle のパースペクティヴのなかでの適応的な行為であると呼ぶのである」(同上)。

協同性について補足しておこう。上述の『子どもにおける道徳判断』でピアジェはルール遊びをもとにしたルール意識の発達的研究をおこない、そこにデュルケームの「機械的連帯」から「有機的連帯」への社会進歩とパラレルなものを見出し、(子どもから大人への)一方向的敬意をもとにした他律性から協同性をもとにした自律性への子どもの発達を提起した。

それについて、ヴィゴツキーは「子どもの心理発達における遊びとその役割」のなかで、ピアジェのこの書物を高く評価しつつ(そして一言の批判もなく)、遊びの最後の段階である協同的なルール(遊びの利益のために遊び手全員の合意によるルール変更を含む)を、ルール遊び以前の虚構場面を伴う遊びの伏在的ルールのなかに見出し、それを「対自的ルール」「自己限定のルール」「自己決定のルール」「協同性のルール правило сотрудничества」と特徴づけている。彼は、そのことによって、生活のルールの内化としての遊びのルール(ピアジェ)を発生的にひっくり返して、今日の遊びのルールは明日の生活のルールであること(発達の最近接領域)、いいかえれば、ピアジェが発達の後の段階に発生すると考えた協同性は、無意識的な形態においてであるが、すでに就学前期の遊びのなかにある、と考えたのである。[8] したがって、ピアジェが推測したようにヴィゴツキーは協同性に関心がなかったのではなく(1962 / 1997, p.509)、関心の持ち方がピアジェとは異なったのである。

だが、そうした関心の持ち方の相違の根源には何があるのだろうか。それは

理論的には生物学的人間観と歴史的人間観の相違に起因するのかも知れないが、同時に、フランス語圏とロシアとの歴史的文脈に起因しているのかもしれない。

概念と一般化

ピアジェのコメンテールに戻ることにしよう。彼は、自然発生的概念と科学的概念との関係や、一般化についてのヴィゴツキーの考察にコメントをほどこしている。これらの面では、ピアジェはヴィゴツキーとの一致を前面に押し出しているが、正確に理解するために、まず、前者から始めよう。

1．ピアジェは「ヴィゴツキーの著作のなかに、『自然発生的』概念と『非自然発生的』概念とを研究するために彼が私に同意してそれらをいかに区別したかを見出して、真の喜びを感じた」(1962 / 1997, p.510)と率直に述べている。また、ヴィゴツキーがピアジェはこの区別に固執しすぎるとして非難して、たしかにこの同意は取り下げられているが、ヴィゴツキーが「非自然発生的概念の習得は子どもの精神に由来する『痕跡』を同時に含んでいることや、したがって、自然発生的概念と教育とのあいだに『相互作用』を置くことが必要であることを主張しつつ非難の意味を明らかにするときにさえ」(同上)、ピアジェは彼との完全な一致を感じていた、という。そして、ヴィゴツキーの「誤解」[9]にもかかわらず、「私は、何にもまして、教育は子どもから自然発生する知的発達に関する体系的な仕事のある配置から(普通の方法がなすよりもはるかに大きな)利益を引き出すことができることを主張した」(1962 / 1997, p.511)と述べている。

2．このように、自然発生的概念の位置づけやそれの「非自然発生的」概念との連関について、ヴィゴツキーと大筋において一致することが、この問題でのピアジェのコメントの基本となっている。それは、ピアジェが行ってきた一連の研究、「数、物理的な量、運動・速度・時間、空間、偶然の諸概念、物理法則の帰納的推論、クラス・関係・定理の論理構造、の発達、要するに、大多数の基礎的な科学的概念の発達」に関する研究のイントロダクションとなったものは、初期ピアジェの自然発生的概念の研究(『子どもにおける言語と思考』『判断と推理』『世界の表象』など)であることによって、示されている(1962 / 1997, p.

511)。してみれば、小論ですでに引用したピアジェのヴィゴツキー評価 ── 「私は、1934年当時はそうでなかったが、ある点ではヴィゴツキーとより多く一致している」 ── は、このことを指していると思われる。

ピアジェはさらに、ジュネーヴとフランスにおける幾何学教育を事例にとって、いっそう具体的に説明している。一般的な傾向として指摘できるのは、(1)幾何学の教育は、7歳に始まる算数の教育に対して、より遅く始められること(概して、おおよそ11歳)、(2)その教育は、空間操作が延長的に適用される論理操作に帰着するような質的な相を通過することなく、直ちに、専門幾何学的または測量幾何学的なものとなる、(3)その教育は発見の歴史的順序に沿っている。すなわち、最初にユークリッド幾何学、かなり遅れて射影幾何学、最後に(大学で、つまり、普遍性において)位相幾何学(トポロジー)、である。

それに対して、ピアジェは現代幾何学理論と子どもの概念から出発する。現代幾何学理論は、そこから射影的構造とユークリッド的構造とを並行的に引き寄せることができる位相幾何学的構造から出発している。また、この幾何学理論は論理学に立脚しており、結局のところ、幾何学的な考えと代数学あるいは数的な考えとのあいだのますます緊密な連関が存在している(同上, p.511-2)。そうした理論状況を子どもの概念に照らし合わせながら、ピアジェはヴィゴツキーとも関連づけて、次のように書いている。

> さて、ヴィゴツキーの意向に沿って、子どもにおける幾何学的操作の形成を検証するならば、その形成は古典的な学識の教育の精神よりも幾何学理論のそれに順応していることが見出される。1)子どもは数的操作と同時に空間的操作を、両者の相互作用を伴って、構成している(とくに数の構造と連続の尺度の構造とのあいだには特筆すべき平行関係が存在している)。2)子どもの初期の幾何学的操作は本質的に質的であり、全体として彼の論理的操作(順序、入れ子構造など)に平行している。3)子どもが発見する初期の幾何学的構造は本質的に位相幾何学的本性に由来するものであり、つまりそこでは、子どもは実に平行的に初歩的な射影的構造とユークリッド的構造を構成している。(1962 / 1997, p.512)

こうして、ピアジェは、ヴィゴツキーによる批判にもかかわらず、子どもにおける自然発生的概念と科学的概念の関係にかんするヴィゴツキーの考えと一

致すると見ている。以上については、ピアジェがあげた子どもの科学的概念(自然発生的な)については事実的な検証を要することであるが、きわめて興味深いコメントである。

3．とはいえ、ピアジェは、ヴィゴツキーとの意見の相違を二つあげている。

そのひとつは、「自然発生的概念と非自然発生的概念の相互作用」をめぐる問題である。この相互作用はヴィゴツキーが考えた以上に複雑であり、ある場合には、教育的伝達は「自然発生的構造」を延長するために子どもによって「よりよく同化」され、発達を促進する。しかし、他の場合には、自然発生的構造に関連づけられないために子どもによって同化されず、発達を抑制する(同上)。このように教育的伝達は両義的なのであり、ピアジェは端的に「ヴィゴツキーがそれを許容したと思われるように、まさしく学識の次元における新しい概念の習得はたえず大人の教授学的介入に由来するとは、私には思えない」(同上)と述べるのである。

ここでピアジェはヴィゴツキーの「発達の最近接領域」(これは『思考と言語』第6章に述べられている)の考え方を検討すべきであるのに、それは避けられている。ヴィゴツキーはあらゆる「教授学的介入」を是としたのではなく、「発達の最近接領域」に位置づくそれを肯定したのである。今日では有名となったこの考え方に、なぜピアジェは注意を向けなかったのか。その理由を探求しなければならない(後述)。そのかわり、彼はいわゆる「活動」学校をとりあげ、そこに、「それ自体は『自然発生的』ではないが、子どもの側から自然発生的なものの加工を引き起こす」(同上)より豊かな教授の形態があると主張するのである。

第2に、以上のこととも関連するが、「自然発生的概念と科学的概念それ自体のあいだの諸関係」(同上)の問題があげられている。ピアジェは、ヴィゴツキーのシステムの鍵は「科学的概念と自然発生的概念は異なる点から出発するが、再結合される」という点に見出し、「この点について、私たちは全体として一致する」(同上)と述べている。もっとも次のような留保条件がつけられている ── 「科学的概念の社会発生(科学史の領域、ある世代から後続する世代への知識の伝達の領域に関して)と『自然発生的』構造の心理発生(社会的、家族的、学識的な環境との相互作用によって確かに影響をうけるのだが)とのあいだには、歴史的

および周囲の文化による心理発生の全体的決定ではなく、出会いがある、ということを意味するならば」(1962 / 1997, p.514)。この留保条件は不必要であろう。「歴史的および周囲の文化による心理発生の全体的決定」を認めれば、心理学もまた不必要になり、それはヴィゴツキーの見地とは異なるからである。

こうして、ピアジェの述べる二つの概念の関係における意見の相違は、前者の関係、つまり、教授のあり方に収斂されることになる。

ピアジェのコメンテールの最後に登場するのは、ピアジェのいう操作、ヴィゴツキーのいう一般化をめぐる問題である。

1．ピアジェはまず意識化および意識化のデカラージュ(ずれ)から始めている。ピアジェは意識化のデカラージュについてはヴィゴツキーと概ね一致することを認めている ── 「意識化の不在が自己中心性の残滓を構成することをヴィゴツキーが認めていないことを除いて、…意識化のデカラージュについて、私たちは概ね一致している」(1962 / 1997, p.514)。

しかし、ピアジェはこの問題をもう少し詳しく検討している。まずヴィゴツキーの考え方は、1）意識化が遅れて発生するという性格は、「この意識化が ── 制御と同じく ── もっぱらある機能の発達の最後に現れるという、よく知られた『法則』のたんなる結果」(同上)であり、2）意識化は、「『いかに』に、いわば操作にさかのぼるが故に、なによりも、もっぱら活動の結果を手にする」(同上)、という二つの点でまとめている。そのうえで、ピアジェはこの二つの点は正しいのだが、事実の確認に限定され、説明されていない、という。ピアジェにとって、この問題の説明は、「自分の活動に中心化されたある主体が、自分の結果とは別のものの意識を理解する理由をまったく持っていない」(同上)と判るときに始まる、いいかえれば、「ある活動が他の可能な活動、とりわけ他者の活動と比較される脱中心化の状況が、『いかに』と操作の意識化をもたらす」(同上)と言うである。つまり、ピアジェの考えでは、自己中心性と脱中心化の観点こそ、意識化の説明たりうるのである。

2．ピアジェは「ヴィゴツキーの場合のような単純な線状のシェマと脱中心化のシェマのあいだの相違」(1962 / 1997, p.514)は知的発達の主要な要因に現れるとして、ヴィゴツキーの場合のそれは「知覚の一般化」にあると見ている。

もっとも彼は遠慮深くそのように言っているのである。――「ヴィゴツキーを読むと(ご承知のように、私は彼の他の著作を知らないのだが)、彼は主要な要因を『知覚の一般化』のなかに探求している、と思われる」(同上, p.514-5)。こうしたところに資料の限定の罪があらわれている。もし、ピアジェが『思考と言語』の第5章、第7章を一緒に読んでいれば、知覚の一般化に限定されることはなかったであろうし、1962年当時にその条件はなかったが、ヴィゴツキーの一連の年齢期心理学の著作を読めば、「単純な線状のシェマ」とは呼ばなかったであろう。そこでは、人格発達の次元において、安定的年齢期における知覚－記憶－思考－概念という中心的形成物と副次的形成物の相互関係、それらに絡まる1歳、3歳、7歳、13歳、17歳の危機的年齢期における心的体験の再編をダイナミックに描こうとしていたからである。

とはいえ、ピアジェは上記の文脈において一般化に対置される自分の考え、つまり、「操作の構造」について論じている。彼にとって、知的発達の主要な要因は「可逆的になっていき、きわめて明瞭な法則のもとで全体の諸構造に接続する、内的活動としての操作の構造」(同上, p.515)である。そして、一般化の進歩はこのような操作の構造の結果である、というのである。ここで、ヴィゴツキーとピアジェの相違がきわめて明確になる。ヴィゴツキーにとって一般化とは語義 значение слова の問題であるが、ピアジェの場合は活動の問題である。それが、どのようなより広範な相違につながっていくかは、後述することにしたい。

3．ピアジェはヴィゴツキーとの観点の違いを「花とバラ」の包摂課題を事例に説明している。

まず、ピアジェはヴィゴツキーにおける包摂(ヴィゴツキーは全体と部分の関係と呼んでいる)を次のように見ている。――「子どもは一般化と学習の組み合わせによって包摂を発見する。すなわち、彼は、『バラ』の語そして『花』の語を使用することを学びながら、まずそれらを並置するが、『すべてのバラは花である』という一般化を行い、そして、『花に含まれるバラ』という包摂に達したために逆は真ではないことを発見すれば、十分なのである」(同上, p.515)、と。

それに対して、ピアジェは、問題はもっと複雑であると指摘している。ここ

でピアジェは、ある子どもの事例をあげて、それを説明している。――「すべてのバラは花であり、すべての花はバラではない、と断言しながらも、ある子どもは、ある面では花はバラよりもたくさんある、と結論づけられない。この拡張された包摂に達するためには、実際、A(バラ)＋A'(バラでない花)＝B(花)、A＝B－A'、したがって、A＜B、という操作のシステム、可逆性が包摂の必要条件を構成するようなシステムを、構築することが必要であろう」(同上, p. 515-6)。要するに、包摂のなかには可逆性が含まれねばならない、という説明である。

こうした事実は無視するわけにはいかない。ただし、全体と部分の関係についてのヴィゴツキーの着想については、より正確に捉えておく必要があるだろう。子どもは「バラ」よりも先に「花」の語を使うようになる(先に「バラ」の語を覚えたとしても「花」の意味で語る)。このように、子どもは全体から部分へ、一般的なものから特殊的なものへ進むのであり、語そのものが一般化された意味を担っている。ヴィゴツキーが強調しているのはこのことであり、それを『思考と言語』第５章と関連づけて捉えるなら、その先にあるものは、全体は諸部分の加算的総和ではなく、部分は全体によって規定されてくること、さらに、諸部分のなかには全体のすべての性質をもっとも単純な形で凝縮した単位としての部分が存在することであり(たとえば、資本主義社会の単位としての商品)、そこでは、形式論理を超えた弁証法的な「真の概念」にやがて繋がっていくものとして、一般化の発達が構想されている。資料の制約のために、ピアジェが読めなかったことの一つがこれである。

それぞれの根本にあるもの

これまではピアジェのコメンテールに即して、その場に応じてコメントを加えてきた。ここからは、やや大づかみに、ピアジェによるヴィゴツキー理解の問題点について述べてみたい。そのために、『思考と言語』第２、第６章にとらわれずに、ヴィゴツキーが書き記した全体を視野に入れることにする。

まず第一に指摘すべきは、ピアジェはヴィゴツキーにおける言語の位置づけを理解しなかったことである。それは、いくぶんはピアジェに提供された資料

の制約によるのであるが、それ以上に、ピアジェの発想のなかに言語の積極的な位置づけがないことに由来するであろう。すでに紹介したところであるが、自己中心的言語は知的自己中心性の「翻訳」であるというピアジェのことばに、そのことはよく表されている。

そのことを敷衍すると、子どもの心性 la mentalité としての自閉性―自己中心性―社会性という初期の見解を起点にしつつ、認知的自己中心性―脱中心化、論理操作の構造の発達諸段階などの認知発達における不動の図式が発達の主軸としてまず存在するのであるから、ことばは子どもの心性の「翻訳」にすぎないものになる。ところが意識の心理学的諸事実の多くは認知発達の平行的な「翻訳」に位置づかないので、たとえば、子どもの感情を語るときには「オプティミズム」に頼らざるをえないのである。

ここが、子ども・人間の発達において言語に積極的な意義を見出す『思考と言語』との決定的な相違点である。『思考と言語』の主題は言語的思考の解明であり、その鍵となったのは、一方ではことばそのものであり、他方では概念や一般化でもある語の意味(語義, значение, la signification)であった。そのうえで、ヴィゴツキーは、一方では内的言語のもつ機能的特質(自分へのことば)をよりよく表すために、また、他方では思考におさまらない人間の意識と言語との関係を考察するために、語の客観的な意味を表す語義と語の主観的なあるいは人格的な意味である意味(смысл, le sens)を構造的に捉え(「意味」がより大きな円である二つの同心円)、意味が語義(概念)の発達を促すという側面に光をあてたのである。この点には、すでに言語的思考の問題範囲を越え出した着想が認められるのであって、その範囲を越えていくための理論的考察が『思考と言語』を締めくくった第 7 章のモチーフであった。ピアジェはこれをどのように捉えるのであろうか。

なお、ピアジェは「ヴィゴツキーと私のあいだに分岐として残るものは、おそらく、自然発生的活動の本性の問題であろう」(1962 / 1997, p.514)と正しく述べている。それはことばの問題での相違点と重なってくる。ピアジェのコメンテールでは、自然発生的活動の問題を教育の問題として捉えているので、教育学的文脈において考察すると、ピアジェは論理的操作の構造化を発達の主軸に置いていることから、彼が「活動」学校に共感を寄せることは事柄の必然的な

帰結であろう。そして、ことばが大きく関与する「発達の最近接領域」の考え方に言及しないのもまた当然である。しかし重要なことは、後者は《教授・学習と知的発達》の一般原理として前者を多様な教育方法のひとつとして位置づけうることであろう。

第二に、語義と意味の構造とも関連するが、ピアジェのコメンテールのなかで説明原理の主役を演じている「脱中心化」の概念が含意する問題点を指摘しておく必要がある。たしかに「脱中心化」は認知発達に対する魅力的な説明原理である。「私の意識の肥大化」としての認知的自己中心性はコペルニクス的転換のように脱中心化される。そのことによって認識の客観性が担保されたように見える。しかし、肝心な事柄は、中心性を失い「肥大化」を阻止された自己、つまり脱中心化された自己とは何であるのか、という問いにあり、まさかピアジェはそれに対して「無となった自己」とは答えないであろう。だがピアジェはそれについて何も答えていないのである。

ヴィゴツキーは、13歳の危機以降に本格的に始まる少年期は、概念形成を中心的形成物とする心理構造が発達していくことを述べ、その「逆発達」として統合失調症患者の心理状態をとらえている。ヴィゴツキーのユニークな点は、その疾病に苦しむ患者の心理学的特質を、概念の崩壊による心理システムの崩壊に求めており、概念の崩壊が自己に及んで、自己意識の統合が崩壊していくと、仮説的に問題を提起したことにある。そうした逆発達に対して少年期の発達とは自己意識の形成と概念形成は不可分の関係にあることを意味するであろう(神谷, 2010, 第Ⅱ章参照)。こうして、ピアジェの魅力的な説明原理をヴィゴツキー的に解釈すれば、「私の意識の肥大化」とは自己意識の欠如のことであり、脱中心化された自己とは自己の意識の意識化としての自己意識に他ならない。

ところで、ピアジェの科学的心理学に対してはメルロ＝ポンティらの哲学的心理学からの批判がある。それについてピアジェはやや感傷的に次のように述べている。

> わたくしは、メルロー＝ポンティが、わたくしの脱中心化の理論について、それは、神そのものの観点に身を置いていると言ったのをよく知っている。いささか誇張になるだろうが、しかし、それでもやはり、現象主義心理学者たちのような才能豊かな人たちの努力が、新しい中心化〔中略〕の

方へと逆戻りするような方法論に彼らを追いこみ、結局、彼らの思想の価値を傷つけているのを眼のあたりに見るのは悲しいことである(1965 // 1971, p.171)。

「新しい中心化」と特徴づけられた《具体的人間》の観点から、相手は《神そのものの観点》に立っていると応酬するのは、いかにもエスプリの効いたやりとりである。神そのものの観点というのは言い過ぎであるにしても、ピアジェが脱中心化された自己とは何かを答えないうちは、自己を喪失した普遍主義のそしりは免れえないであろう。だが、それ以上に重要なことは、ヴィゴツキーが究明しようとした語義と意味の関係、自己意識と世界にかんする概念の形成との関係のなかに、ピアジェ的な普遍主義と、メルロ＝ポンティがそこから抜け出すことに禁欲的であった具体主義とを、同時に克服する道が隠されていることである。それは小論の課題ではないが、関連する問題であることだけを指摘しておきたい。

第三に、種々の相違にもかかわらず、ピアジェ理論はヴィゴツキー理論のなかにどのように位置づけられうるのかを、少なくとも、その位置づけの基本を明らかにしておくことが必要である。筆者はそのことが可能であると考える。そのためには、ヴィゴツキー理論の全体をどのように捉えるべきかをまず述べておかねばならない。

筆者の仮説によれば、ヴィゴツキー理論を全体として把握するためには、(1)『思考と言語』に結実した媒介的発達理論、(2)児童学的著作における人格発達理論、(3)『情動に関する学説』などに示された情動発達理論、という三つの路線を統合的にとらえることが求められている。その詳細は神谷(2010)をお読みいただくほかはないが、ここでは、その統合においてキーポイントとなる情動理論と心的体験 переживание の概念について、いくらか述べておこう。

ヴィゴツキーの情動理論はまさしく未完であり、彼はこの問題ではスピノザから大いに学んでいることを考慮し、ヴィゴツキーが述べたことをスピノザの精神によって解釈することが可能であると思われる。そうすると情動の発達の基本的な路線と構造的な複雑性とが同時に明らかになる。紙数との関連で、結論だけを述べておきたい。

情動の発達は次のような五つの相をもって進行する。《　》内はスピノザの

規定である。

⑴ 《身体の変状》としての情動。それは《コナトゥス》、《自己保存》のための欲望等のもっとも基本的な情動である。

⑵ 《身体の変状の観念》としての情動。これはヴィゴツキーの場合には「思考の主人としての情動」がそれに照応するであろう。

⑶ 《身体の変状の観念の観念》。これはヴィゴツキーにあっては「自己の情動の認識」に該当するであろう。

⑷ ヴィゴツキーにおける「思考の下僕としての情動」。

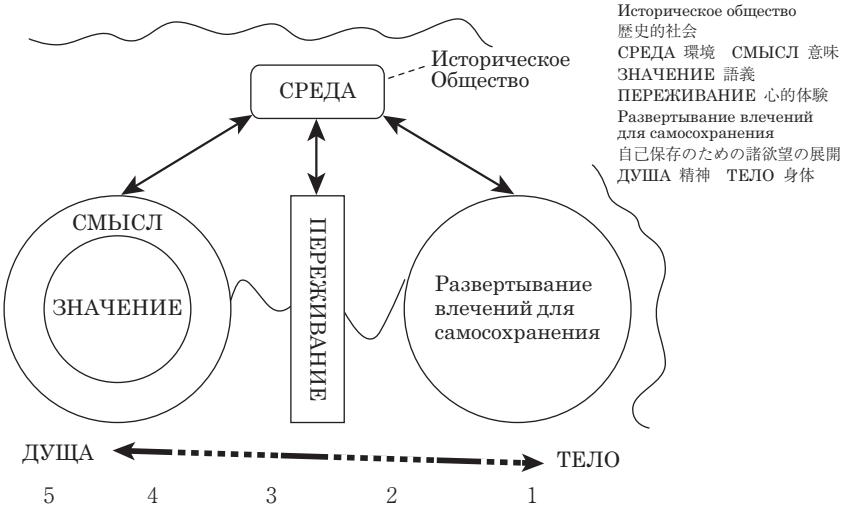
⑸ 《第３種類の〔高次の〕認識が最大の満足をもたらす》。これは《自由なる必然性》の認識による満足というものであり、ヴィゴツキーの場合には「情動となったルール」(遊び論において)を意味するであろう。

こうして情動は身体と関連をもつところから始まり(身体の変状)、やがて、思考との関係が主軸になっていく(思考と情動のシステム)。そのような５つの相は、大まかに、子どもから大人にかけての情動の発達を表しているが、情動の複雑なところは、その５つの相が、たとえば、大人において同時に現れうることである。スピノザは、その『国家論』において、《こうありたいと皆が思う人間》からではなく欲望に規定された《あるがままの人間》から出発して問題を(この場合は国家を)考察せねばならない、と述べているが、まさしく、そのような《あるがまま》とは５つの相が同時に相対立しながら顕現した状態であろう(神谷, 2010, 第Ⅳ章参照)。

ヴィゴツキー理論において、情動と深いつながりをもつものは心的体験の概念である。ヴィゴツキーの探求は、言語的思考の単位としての語義 значение から意識の単位としての意味 смысл、さらに、環境と人格の統一体であるとともに意識の単位でもある心的体験 переживание へと進んだ。そのうち、意味は言語的側面から、心的体験は思考や情動やその他のあらゆる心理的なものがそこに由来するような原初的なものとして、人間における普遍と具体をつなげていく役割をはたす。詳述は省くが、ここにおいて、環境と個人のあいだの原初的な関係であるとともに精神と身体の基本的な連関と考えうるような概念が手に入れられたのである(神谷, 2010, 第Ⅳ章参照)。

以上のことを、ヴィゴツキー理論の全体性を内容的に表示する図にまとめて

ヴィゴツキー理論の内容的全体像



おこう。

ひとこと説明しておきたい。語義―意味の同心円をコインの表面とすれば、その裏面あるのは「自己保存のための諸欲望の展開」である。そしてあらゆるコインには厚みがあるが、その厚みに位置するものは「心的体験」である。その心的体験は、環境と人格の統一体であるとともに、心身の結節点でもある。

ピアジェ理論を、この図のなかに位置づけるとしたら、彼の理論は語義の部分に、より正確にいえば、語義へと「翻訳」される論理的思考に、その事実的な探求のなかに自己の姿を現すであろう。「翻訳」であるが故に、その論理的思考(論理的操作)は内的言語のなかで実現される意味との結びつきが切断されてしまうのであって、そこからピアジェの普遍主義が醸成されることになる。この点ではメルロ＝ポンティによる批判は正しいのである(そしてピアジェによる現象主義批判も正しいのだが、それは小論の主題ではないので、別の機会に論じることにしよう)。

第四に、両者の相違の根源には何があるのか、という問題である。ピアジェは晩年、自分は心理学者ではなく認識論学者である、と語っている(ブランギ

エ, 1976 // 1985, p.76)。その意味するところは、「同化」と「調整」という生物学的概念を用いて、「均衡」理論を打ちたて、それによって認知発達を理論的に把握しようとしたのであるから、人間の適応の特質は他の動物と違って「知能」によるのだ、という点にある。それ自体としては正しいこの命題を、ヴィゴツキーがたびたび引用したマルクスの次の定義 ── 「私の環境への私の関係は私の意識である」(1845 // 2010, c.408) ── と比べてみよう。それは、ひとまず、環境への適応は「知能」によるのか、知能をその一部とする「意識」によるのかの違いとして現れるが、そこから極めて大きな相違が生まれてくる。ピアジェのように「知能」とした場合、それは環境への適応か不適応かという問題にとどまってしまうが、「意識」とした場合には、その定義は、人間は合理的かつ効率的に環境に適応しているように見えるが、より大きな環境を掘り崩しているという複雑な事態(今日の環境問題のような)をも説明し、また「もうこれ以上は同じ生活はできない」と社会状況の激変をひき起こそうとする力は、不適応の克服としてあらたな「均衡」を求める理性的な力であるよりは、それをも含む全人格的な力、人間の意識の全体的な力であることを示している。さらに、それらの命題と定義は、前者が普遍的な人間のみを対象にするのに対して、後者は《普遍的な私》のみならず《一人称の私》にも照応していることを示している。

こうして、認知的な普遍主義に自己限定せざるをえないピアジェ理論と、人間の意識の全体性を普遍と具体において明らかにしようとするヴィゴツキー理論との、それぞれの根源は、上記の命題と定義のなかにある。

ところで、ピアジェはコメンテールのなかで、社会性の概念を自分の立場から解明しようとして、次のように述べている。

> すべての論理的思考は社会化されている、なぜなら、この思考は諸個人のあいだに可能なコミュニケーションを含意しているからである。だが、この個人間の交換は、ふたたび操作であるところの交信、再結合、交差、相互性などに立脚している。そうした個人間の操作のなかに、したがって、アイデンティティーが存在している。(1962 / 1997, p.516)

「すべての論理的思考は社会化されている」というそれ自体としては正しい規定を提起しつつも、ピアジェは、アイデンティティーのような具体的な個人

の全体的な特質さえも、操作に ── 本質的には知的操作に ── 帰着させている。ピアジェの論理的思考、知的操作はあまりにも多くのことを表しているのである。

ヴィゴツキー理論において、アイデンティティーのような概念は根源的にはどのように理解されるのであろうか。上述の意識の定義が書かれたのと同時期に、マルクスは「フォイエルバッハに関するテーゼ」を記している。その第6テーゼをとりあげて、ヴィゴツキーは次のように書いている。

> マルクスのパラフレーズ：人間の**心理学的**本性は、**内側に転移されて人格の諸機能と人格の構造の諸形態とになった**、社会的諸関係の総体である。マルクス：類としての人間について；ここでは、個人について。(1929 / 2003, p.1023 // 2008, p.243)

先ほどのピアジェのアイデンティティーに関する引用と比較してみると、ヴィゴツキーは、マルクスに依拠することによって、比べものにならないほど、豊かな視点を獲得している。操作ではなく「人格の諸機能と人格の構造の諸形態」であり、「個人間の交換」「交信、再結合、交差、相互性など」にとどまらず内面化された「社会的諸関係の総体」── それこそ、ヴィゴツキー理論がピアジェ理論を包摂しうることの根源である。そして、ヴィゴツキーによってなされた「フォイエルバッハに関する第6テーゼ」の心理学的転倒はヴィゴツキー理論をより深く理解する鍵のひとつとなるのであるが、そのことについてはすでに別のところで述べたので、ここでは繰り返さないでおこう(神谷, 2010, 第Ⅲ章参照)。

ピアジェの独創的な「脱中心化」の理論をヴィゴツキーの精神でどのように改造すべきか、ピアジェ理論はヴィゴツキー理論のなかでどのような位置を占めうるのか、両者の相違と関係の根源には何があるのか、について述べてきた。このようなことが明らかになれば、ヴィゴツキーは、たえず相対する心理学理論に対してしたように、批判に終わるのではなく、そこから汲み尽くすことのできるすべてを摂取して、自己の観点を豊かにするであろう。それは多くある。こうして、架空の対話では、ヴィゴツキーは「私はあなたと異なる点もあるが、多くの点であなたに感謝している」と言って、ピアジェの手を堅く握ることが

できる。これが、コメンテールのコメンテールにおける筆者のとりあえずの結論である。

注

1）柴田義松は、『ヴィゴツキー入門』第３章―３「ピアジェとの論争」において、きわめて丁寧にピアジェのコメンテールを紹介している(2006)。しかし残念ながら、ヴィゴツキーとピアジェの両者の見解の一致と不一致がなぜ生じるのか、という理論的根源に迫ってはいない。小論の課題はそこにある。

2）小論が参照しているのは、ヴィゴツキーの『思考と言語』フランス語版(第３版)に収録されているピアジェのコメンテールであるが、その脚註の執筆者と考えられるのは、訳者であるフランソワーズ・セーヴ、あるいは、フランス語版に含まれている「解説」の執筆者であるリュシアン・セーヴであろう。

3）ヴィゴツキーの娘であるギタ・ヴィゴツカヤらの『レフ・セミョーノヴィッチ・ヴィゴツキー』(1996)の巻末に掲載されているヴィゴツキーの著作目録によると、『思考と言語』第７章の英訳は1939年に行われている。また、フランスの哲学者リュシアン・セーヴは62年の『思考と言語』英語版について、次のような興味深い指摘をしている。――「1962年にアメリカの出版社 MIT プレスは『思考と言語』の翻訳、というよりは抄訳を英語で出版した。その二人の翻訳者エフゲニア・ハンフマンとゲルトルード・ヴェイカーは、一部は困難な条件のなか構成され、ドラマティックな事情のなかで完成され、しばしば口述のテキストに固有な繰り返しに満ち、著者による校閲がなされなかったという書物の、いくつかの編集上の欠点を理由にしつつ、ルリアの道徳的保証を伴って、ロシア語で百万字以上に達するこの書物を約三五万字に縮小している。なるほど、入念なやり方で編集されてはいるが、しかし、ヴィゴツキーの批判的、実験的なきわめて多くの発展が重大にも剝奪され、マルクス主義への参照の大部分が正当化できないことだが削除されている」(1997, p. 33)。その意味では、同62年に柴田義松が翻訳・出版した『思考と言語』日本語版が世界初の完訳である。

4）『思考と言語』フランス語版収録のピアジェのコメンテールに対する上記脚註には、「一つの註は『ピアジェ教授は、ヴィゴツキーの著書の第２章の原稿と第６章の要約を読んだあとで、このコメンテールを執筆した』と指摘していた(それはもちろん英語への翻訳の原稿である)」(p.501)と記されている。その「一つの註」は、Thought and Language, 1962, MIT Press, あるいは、la revue Archives de psychologie, édition: Médecine et Hygiène, Genève, 1979, vol. XLVII, n° 183, pp. 237-249 に収録されたコメンテールに付されたものであろう(同上参照)。

5）念のために、ヴィゴツキー『思考と言語』の章構成を示しておこう。

第１章　問題と研究方法

第２章　J・ピアジェの学説における言語と思考の問題

第３章　W・シュテルンの学説における言語の発達の問題

第４章　思考と言語の発生的根源

第５章　概念の発達の実験研究

第６章　児童期における科学的概念の発達の研究

第７章　思惟と語

6）『思考と言語』に収まらないヴィゴツキーのアイディアについては、拙著『未完のヴィゴツキー理論 ── 甦る心理学のスピノザ』（2010）を参照されたい。

7）この一文はピアジェのコメンテールの英訳では欠落しているようである（1962 / 1997, p.507, 脚註参照）。

8）神谷（2011）第４章「遊びにおけるイメージとルールのパラドックス」参照。

9）ピアジェは次のように書いている。「私の観点によれば子どもの自然発生的思考は『戦うために敵を』よりよく知るごとく教育者によって注意深く知るべきものである、とヴィゴツキーが思い描いていることは、まったくの誤解である」（1962 / 1997, p.511）。ヴィゴツキー『思考と言語』初版英語版第６章にそのような箇所があるのかどうかを調べてみる必要がある。

引用文献

ブランギエ, J.-C.（1976 // 1985）, ピアジェ晩年に語る, 大浜幾久子, 国土社

神谷栄司（2010）, 未完のヴィゴツキー理論 ── 甦る心理学のスピノザ, 三学出版

神谷栄司編（2011）, 子どもは遊べなくなったのか ── 「気になる子ども」とヴィゴツキー＝スピノザ遊び理論, 三学出版

Маркс, К., Энгельс, Ф.（1845 // 2010）, Немецкая идеология, в кн.: Экономическо-философские рукописи 1844 года и другие ранние философские работы, Академический проект, М.〔マルクス, エンゲルス, ドイツ・イデオロギー〕

Piaget, J.（1962 / 1997）, Commentaire sur les remarques critiques de Vygotski concernant Le langage et la pensée chez l'enfant et Le jugement et le raisonnement chez l'enfant / Vygotski, L., Pansée et langage, Traduction de Françoise Sève, suivi de Commentaire sur remarques critiques de Vygotski de Jean Piaget, 3 édition, La Dispute, Paris, pp.501-16.

ピアジェ, J.（1965 // 1971）, 哲学の知恵と幻想, 岸田秀, 滝沢武久訳, みすず書房

Sève, L.（1997）, Présentation, Vygotski, L., Pansée et langage, Traduction de Françoise

Sève, suivi de Commentaire sur remarques critiques de Vygotski de Jean Piaget, 3 édition, La Dispute, Paris, pp.19–34.
柴田義松(2006), ヴィゴツキー入門, 子どもの未来社, 東京
Выгодская, Г. Л., Лифанова Т. М. (1996) Лев Семенович Выготский. Жизнь, деятельность, штрихи к портрету, Academia, M.〔ヴィゴツカヤ, リファノワ, レフ・セミョーノヴィッチ・ヴィゴツキー ── 生活、活動、肖像の輪郭〕
Выготский, Л. С. (1929 / 2003 // 2008), Конкретная психология человека / Выготский, Л. С., Психология развития человека, М., Смысл-Эксмо // ヴィゴツキー心理学論集、柴田義松・宮坂琇子訳、学文社〔ヴィゴツキー, 人間の具体心理学〕
Выготский, Л. С. (1934 / 1982 // 2001), Мыщление и речь / Выготский, Л. С., Собрание сочинений, т. 2, М., Педагогика // 思考と言語、柴田義松訳、新読書社